

「令和2年度群馬県立自然史博物館活動の評価」について

群馬県立自然史博物館専門委員 小田川浩道

新型コロナウイルスの感染拡大で、県立の美術館や博物館は予約制導入など感染防止のための制約が課せられた。コロナに対する知見の集積とワクチン接種率の向上で日常が戻りつつあるが、入館にあたっての体温測定、マスク着用、3密を防ぐための入館者数の管理は今後も続くことになる。内部評価の目標設定も次期計画策定で大きく見直しを迫られることになるだろう。

懸案の収蔵スペースについては、標本の再配架でスペース確保に取り組んだが十分なスペースを確保できず、受け入れ方針を見直して同定可能で良好な状態にある標本のみを受け入れることにしたという。化石、鉱物、昆虫など在野には群馬県立自然史博物館の開館前から発掘・採集を行い、貴重な標本や資料を所有する人がいる。こうした人々が集めた貴重な収集物が散逸しないよう、日頃からの情報交換と信頼関係の醸成が欠かせない。収蔵のハードルは高いが、常に情報を集めておく必要がある。

報道機関の立場から、情報発信の強化を提案したい。コロナで館内イベントが減少したことでメディアに取り上げられる件数が大きく減少しているという。令和2年度の取材対応件数は12件（前年度比32%）だった。上毛新聞のデータベースによると、掲載記事数は2019年20本、2020年13本、2021年は9月までで8本である。減少傾向はコロナ下でやむを得ないが、これは発信の細分化で改善できるのではないか。

会期の長い企画展では展示替え後の後期に話題になる展示物を用意しておく。クイズなどの抽選発表を会期中に設定して贈呈式を行うなど、切れ目なく話題を提供できるよう検討すべきだ。ホームページの更新件数、フェイスブックでの発信数は大きく伸びているが、博物館の活動を多様な年齢層に知ってもらうにはテレビや新聞の力はやはり大きい。広く告知するためにもっと広報を積極的にしてはどうだろうか。

企画展と連動した関連書籍のコーナーが設けられた書店もあった。これは効果的な情報発信の形の一つだろう。予算の問題はあるが、県内随一のにぎわいがある高崎駅のコンコースに企画展の看板を設置できないか。そうすれば来県者を含め多くの人目に触れ、来館につながる。近代美術館や歴史博物館のPRも同時にできるメリットもある。県として検討してはどうだろうか。